

## 豚流行性下痢の発生が 日本の養豚場の生産性に与える影響の解析

豚流行性下痢（PED）は食欲不振と水溶性下痢を主徴とする豚の急性伝染病です。2013年10月1日に沖縄県で発生したPEDは2014年には全国的に発生が相次ぎ、2013年10月1日から2014年8月末までの間に、38道県、816戸、37万1,071頭の死亡が確認されました。今回、養豚の生産性評価システム（PigINFO）に参画している農場を対象に、PEDの発生による生産性への影響を調べました。

### ☆ 技術の概要

1. PED流行期間（2014年4月～6月）に、PEDの発生があり臨床症状が30日以上続いた農場（L農場）とPEDの発生があり臨床症状が30日未満の農場（S農場）は、非発生農場よりも哺乳中の死亡率は高かった（図1）。
2. 2014年10-12月期（PED流行期間の180日後）に、L農場の出荷頭数（/母豚/年）は非発生農場に比較して少なかった。S農場の出荷頭数（/母豚/年）は、非発生農場に比較して少ないものの、長期発生農場よりは多かった（図2）。

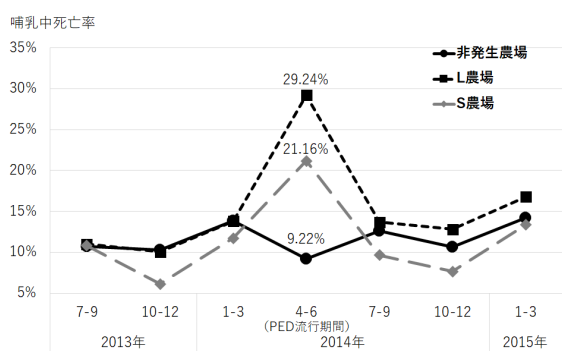


図1 哺乳中死亡率の中央値

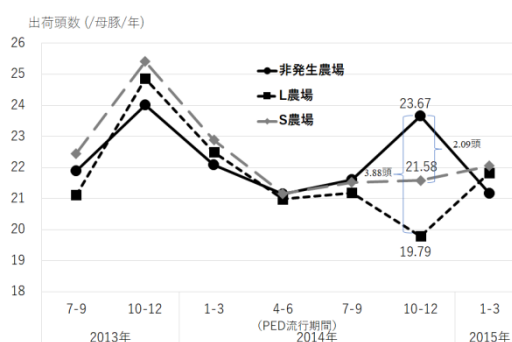


図2 出荷頭数(/母豚/年)の中央値

### ☆ 活用面での留意点

1. PEDの発生により哺乳期の子豚が大量に死亡あるいは淘汰され、肥育期間（約180日）後の出荷頭数が大きく減少しました。出荷頭数減から推定されるPEDの発生による経済的な損失は、L農場において母豚1頭当たり31,400円となりました。
2. PEDの発生があっても、短期で臨床症状が抑えられた農場での損失は小さく、疾病への早期対応による経済的なメリットが認められました。
3. 詳細については、農研機構「お問い合わせ窓口」

（<https://www.naro.affrc.go.jp/inquiry/index.html>）までお問い合わせください。

（農研機構 食農ビジネス推進センター 山根逸郎）